
高橋くんの歌

J之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高橋くんの歌

【Nコード】

N3594F

【作者名】

J之介

【あらすじ】

高橋くんはふつーの学校に通う、ふつーの学生。そんな高橋くんが入部した部活は『歌部』。ちょっと変わった部活の信念、バーニングハートの名の下、今日も高橋くんは歌います。

高橋くんの歌1

今日の日没は五時ちょうど。

学校の鐘が鳴ると同時に、空には淡い紫色が広がっていた。

けれど、西の空の方角には、まだ、まばゆい橙色が広がっている。

まるで黄金のはちみつに、真っ赤なばらの花びらを溶かしたら、

こんな色になるんじゃないかと思うような、そんな色だ。

ああ。綺麗だなあ。

世界が眩しすぎて、目がちっかちっかするよ。

今日は、部活も、補習もなにもない日だから、早く帰ってゲームでもしようかとオレは思ってたのに、学校の裏庭の掃除に手間取った。(今週うちの班が担当だったことすっかり忘れてたんだ。)

季節は秋。ってことは、食欲の秋に紅葉の秋。ううんいい響きだ。紅葉の秋なんて、とくにすばらしいじゃないか。

夏とは違う、淡い青空の中に、秋色に色づいた葉がよく映えるんだ。そりゃー綺麗だ。教室の窓の外なんかすげえ絶景。そんなものを毎日眺めてれば、あーもう秋があつていやでも感じる。

けど、見上げた視線の先は綺麗で和むが、視線を落とせば、そこには落ち葉という名のゴミの山が発生しているからまいる。掃除が非常にめんどい。

しかも。今のご時世に、竹ぼうきってなによ？ これしか掃除道具箱に入ってたなかったんだが、どういうことよ？ もしかしてうちの学校って貧乏？

もっといい掃除道具を買ってもらいたいと思ったが、なぜか竹ぼうきを持つと、気分が、こっ、ね。高揚っつーか、興奮するのはなんでだろうね。

飛べる！ と、思うのだ。

これでオレも空を！ と、思うんだよ。

いけるぜえ！ ってね。

実際飛べませんよ？ オレには魔法とか、魔術とか、なんか、そういう特別な力なんてないからね。でも思っただよな！。不思議だよな！。これがアニメや漫画や小説の影響ってやつですかね。

重みのある竹ぼうきを、くるりと一回転させるだけで、背筋がぞくぞくする。我慢できずにまたがってみた。

10秒待ってみる。

もちろんなにも起こらない。

30秒待ってみる。

やっぱりなんも起こらない。

1分経って、ようやく地面を蹴ってみたが、浮きを持続させられない。そう、これはジャンプだ。

それでもあきらめられずに、下っ腹に「うっぐおおおお」と雄たけびもつけて、力を込めたが。やっぱり駄目だった。

オレの雄たけびを聞きつけて、同じ班の女子数名が遠くの方から、みょうちきりんな物を見るような目で、オレを見つめていた。

なんとという冷ややかな視線。

なんとという汚物をみるような視線。

背筋がぞつとした。寒い。怖い。女子は怖い。

オレの隣の席の女子（沢田サン）が、他の女子に背中をつつかれながら一歩前へ出た。

困ったような、嫌々みたいな顔で、沢田サンは言った。

「なにしてるの？ 高橋くん」

「いえ、なにも……」

実を言うと、見ての通りですが。飛べるかな？ とか思ってたんですよ。この、竹ぼうきで。でも実際は飛べませんでしたよ！ あはははは！なんてことを言ったら、ますますこの場の空気は凍ると、空気を讀んだオレは、そつと静かに竹ぼうきから降りた。

「ちゃんと掃除やってよね！」

沢田サンじゃない女子が言った。

オレは顔を上げずに、「はい」とちっさく答えて、もくもくと掃

除を開始した。

さわさわさわと、竹ぼうきを動かすと、ようやく女子の気配が散った。オレはほっと胸を撫で下ろして、さわさわさわと調子に乗って竹ぼうきを動かした。ちよっと、これ、楽しいぞ。全然葉っぱあつまんねーけど。

学校の裏庭は広いから、みんな遠くで掃除している。

ふと顔を上げれば、何人かの女子と男子は、なにやら集まって話をしている。ちよっと楽しそうであらやましい。けど、オレみたいに一人でちゃっちゃと掃除してるやつもいる。沢田サンとか。

さつきも言っただけど、沢田サンは、オレの隣の席の女子だ。仲がいいか悪いかといえは、普通だ。オレから見ると、沢田サンはふつーの女子。派手でもなく、暗くもなく。どっちかっていえば、暗そうだけど。でも、本当にふつーっと思える女子だ。

少し長めの黒髪とか、セーラー服のリボンとか、スカートの裾が、少し肌寒い秋の風になびいているのが見えた。

気があるわけではないのだが、こうこう光景をみると、どうしてもどきっとする。男だからね。遠目だからかもしれないけど、きれいだなーってしみじみと思った。切なくもなつた。秋はなんでも感傷的になるねえ。オレは、思春期だから余計にかな。

俳句部、詩部というか、なんかとりあえず思ったことを思ったままに歌っどけ！ みたいな、バーニングハートの持ち主から作られたという、『歌部』に入部しているオレは、首を傾げた。

なんかいいの、できないかな。できそうなんだがな。うーんうーん。

この、今のオレの感情を。うーんうーん。

竹ぼうきでさっさと落ち葉を掃きながら、オレはびんときた。

ぐるりと視線をめぐらせて、その先には沢田サン！ これだ。

「竹ぼうき 掃いた先には沢田サンってどおよ！ う、イケてる気がする！」

むしろイケてる。イケすぎてる。

オレの、ちょっと胸キュンしちゃった思いが、この歌には込められている。のが、わかるでしょ！

うわーやべー。こんないい歌なのに、発表できねー。発表したら、オレの今の気持ちみんなにばれる。だだもれじゃないか。それは困る。

からかわれるのは必須だったのに、席が隣な奴と、こんなことで気まずくなるのは嫌だ。教科書忘れたとき、見せてもらえなくなっちゃまう。それは困る。

だからオレはこの歌をそつと胸にしまった。

そんな一人遊びをしていたから、オレの持ち場はなかなか掃除が終わらなかつた。というか、落ち葉が掃いても掃いても落ちてくるから、みんなも諦めて掃除を止めたのだ。

オレはこの短時間の間に愛着のわいた竹ぼうきを、最後に綺麗に掃除箱に片づけて、拝み。こうして一人帰り道を歩いている。

空は着実に夜に向かっていている。

紫色が空全体に広がって、一番星が光りだす。月は細い三日月で、白銀に輝いている。

あまりうるさくない大通りをさけて、家路に向かいながら、オレは鼻歌交じりに今日の歌を口づさんだ。

「竹ぼうき、掃いた先には沢田サン。竹ぼうき、掃いた先には好きな人。なんちってね」

胸の中ではちんとはじけた甘酸っぱい感情に、心が小躍りしそうだ。今ならなんでもできそうな気がするの、調子に乗ってるから？ いい歌ができた日は、足が軽くなる。このまま、竹ぼうきなんかなくったって、空も飛べそう。

思いを歌う『歌部』に所属するオレは、明日も歌う。毎日歌う。

オレの中に熱くたぎる思いがある限り。

バーニングハート。

それは『歌部』の心臓であり、オレの心臓でもあるのだ。

高橋くんの歌1（後書き）

読んでくださってありがとうございます。いりました。

高橋くんの歌2 メガネ

オレは一見すると根暗に見えるらしい。もう少し分かりやすく言
うと、オタクだ。オタク系。

オタクに見えるか、見えないかは、やっぱり見かけが一番大事。
うん、そらそうだ。

たとえば、うちのクラスでダントツ人気のある男に、中条くん
というやつがいる。出席番号で、オレの次だ。

中条くんは背が高く、がたいもいい。だもんで、自分の体形を活
かしてバレーボール部に所属している。頭だつてまあまあいいのを
オレは知っている。（この間のテストで、オレは平均だ！ と叫ん
でた。）

一番重要な顔はというと、スポーツ人らしくきりつとしている。
こう、眉毛とかが、きりりって感じ。その上、髪の毛は爽やかにツ
ンツンヘア。ちなみに見た目だけじゃなく、中身もからつとしてい
る。誰に対しても感じのいい性格をしているもんだから、いい男ポ
イントが高すぎる。

そんな中条くんだから、体育の授業でスパイクを一発でも決めれ
ば、もう、女子はきゃーきゃーだ。そろもう、割れんばかりにきゃ
ーきゃーだ。

まだ一年だつてーのに、先輩のお姉さまがたにもかわいいと言わ
れ、今赤丸人気急上昇中のフレッシュくんだ。

オレなんかから言わせてもらえば、うらやましいかぎりである。
そんな中条くんが、オタクと見られることはまずない。

でも、オレはといえば、どこから見ても平凡少年。ただ底上
げしようとして頑張つても、所詮平凡は平凡。身長・体重・顔すべて並
髪の毛は黒。（日本人だからね。）最近散髪してないので、ちょ
っと長くなつたかなー。

メガネは……かけてない。そう、かけてないんだ。

オタクといえばメガネっこなイメージが、オレとしては強いんだけど。

オレだってメガネをかけていたら、まだ「アイツ、オタクだよな」と影で囁かれても仕方ないなと思うけど、かけてないんだよ。だから、オレがオタクと言われるのは少々納得がいかない。それ以外はオタクとして見られても仕方ない見た目だ。それは間違いない。

納得がいかなかったオレは、この高校に入学した後にメガネを買った。黒縁の、見たら一発でそれっぽい！ と思えるようなやつを、百均で。（いやー百均って便利だね。）

これでオレは自他共に認めるオタクになったのだ。実際に自分がオタクかどうかは分からないが、とりあえず、見た目オタクになった。なったら、人にオタクと言われて満足できた。

だって、今のオレ、どっからどうみてもオタクだもんねー。くいとメガネを上げるしぐさもばつちりさ！

もともと人と話すよりも、考えごとをするほうが好きだったことも根暗につながり、オレはクラスの中で孤立するな と思ったが、そんなことにはならなかった。

なぜなら。

「高橋」

今、オレの背中をつついて話しかけてきたやつ……あの中条くんが、オレの友達だからだ。

「おっす、中条くん」

「おっはよ」

満面の笑みで笑う中条くんは、白い歯を光らせて今日も爽やか度はMAXだ。

席替えしても、何の因果か運命か、中条くんはオレの後ろの席になった。

そのとき中条くんは言ったのだ「ラッキー。また高橋の後ろだな、よろしく」と。

そのときオレは思った。（えーと。たぶん、中条くんはオレに好

意的だ。」と。

さらに思った。(こいつ、オレなんかと仲良くしてていいのか?)と。

中条くん派の女子は特に思うだろう。「なんでアイツなんかが中条くんと仲がいいのよ!」と、ややヒステリック気味に。

それは、まあ、そうだな。オレだって不思議だ。中条くんだったら、もつとレベルの高いやつといくらでも友達になれるだろーに。なぜ、オレ。いや、中条くんには他にも友達はあるけどね。なんでその中にオレも含まれてんのかなーと流れるに思ったから、きいてみた。

「ところで、中条くん。朝からこんなことをきくのもなんなんだけど」

「んー?」

「中条くん、オレなんかと友達でいいの?」

「オレ、自分のこと、なんかって言うやつ好きじゃないけど」
おっと、につこり顔ですげーこと言われた。

自分のこと卑下すんなって、言っただろうけど、いやーなんて言うか。中条くん、すげえ。オレだったら人にそんなこと言えない。だってオレはちっちゃい人間だからだ。自分を卑下するほうが、安心するような人間だからだ。

オレは照れくさいわ、恥ずかしいわで、顔が熱くなってきた。

「え、えーと。じゃあ、オレと?」

「つか、なんでいまさらそんなときくんだよ?」

「いやー。いまさらなんだけど、なんでだろなあって思って」

「気に入ったから友達になる以外、友達になる理由ってなんかあるの?」

「うへえ?」

うおっと、きよとん顔ですげーこと言われた。素でこっぴつこと言えるやつってほんとすげー。恥ずかしい。すげー。

先生、頭から火が出そうです! そう叫びたいのをこらえて、オ

レは汗だくになりながら答えた。

「な、ない、かな？」

「だつろ？ オレ、橋本おもしれーと思うもん。特に歌！ 歌部のあれ！ 気に入ってっし！」

「歌」

意外だと思つたら、「そう、歌。ちなみに今朝一番の一句は？」と唐突に言われた。

「え？」

なんだつて？

「歌だよ」

につこり笑つて、もう一回言われた。

……これは、なんか、歌えと。そう言われているんだろつか。

「ええと……いきなりそんなこと言われても、いいの出てこない……」

「いいからいいから。思つたこと、ほら」

ばしーんと背中を叩かれて、オレは前のめりになりながら、ずれたメガネを押し上げた。

「ええと……そーだな。メノマエノ イケメンオトコハ トモダチサ？」

「ははっ！ 語尾あげんなよー！ 友達だろオレたち！ イケメンなんかじゃねーけどな！ お前まじで、人のことのせるのうめーよなあー！」

ばしーんばしーんと男らしくオレの背中を叩きながら、中条くんは豪快に笑つた。その姿に、オレは思わず引きつった笑いを浮かべてしまひながら、そーいえばと、あることに気がついた。

（中条くんて、自分のこと、かっこいいって思つてないんだよなあ……）

つてことは、中条くんから見たら、オレは一体どんなふう映っているんだろつかと、ちょっとだけ興味がわいた。ジャーニーズ風のイケメンだつたりして。ま、そりゃないか。

けど、もしかしたら中条くんも、オレと同じように、メガネが必要なのかもしれない。

(中条くんや あんたもメガネが 必要です)

なんつって。

高橋くんの歌2 メガネ(後書き)

読んでくださり、ありがとうございました。

高橋くんの歌3 パンツ

11月に入り、北風が冷たくなってきた。

夏が終わり、長袖のシャツを着ているのだが、そろそろ朝方と夜の気温には耐えられなくなってきた。

これは早めにカーディガンか、学ランを着ないと、風邪でもひきそうだ。

でも学ランを着るにはまだ早いようにも思える。が、カーディガンは中学の頃から着ているからすでにぼろっちい。

毛玉や糸くずは大量で、袖はびろびろだ。でも、グレーの色あいと、着心地が気に入ってるから、捨てられずにとってある。

まあ、見た目はあんまり気にしてないから、たぶん今年も着ると思う。

あれ、どこにしまったっけなー？

先月中に切ろうと思っていた髪の毛も、とうとう切りに行かなかった。

前も後もぼさぼさ。耳にも余裕で髪がかかっているけど、これから寒くなるからちようどいい。

だらしないとみられるかもしれないが、気にしない。

ありがたいことに、うちのクラスはロン毛が多いから、先生も何も言わないしね。

そんなわけで、季節はようやく秋から冬に移行した。

どこの会話でも「寒いねー」と聞こえる。

寒い、そう、寒いのだ。

女子なんか、マフラーを巻いている。それはいい。オレもしたいぐらいだし。

だけど、女子っていうのは不思議な生き物で、スカート丈が短いままなのだ。

一応うちの校則には、女子のスカート丈はひざ上下5センチって

ある。それが規則らしいが、いまだき守っている方が珍しい。

うちの学校に限らず、どこの学校の女子（制服着ている女子はみんな）も、みんなミニスカートだ。

見ただけで「短っ！」って思うくらい、短い。

靴下は長めのハイソックスか、ニーソか、ルーズをはいている。

オレからしてみれば、寒いんだったら、スカート丈を長くすればいいのと思うのだが、そういうわけにはいかないらしい。

女子は見た目をもっとも気にするから、もちろん流行には敏感。

短いスカートは延々と流行っているから、それ以外の長さなんか、考えられないらしい。（と、テレビで言ってた。）

オレたち男も思春期だから、そりゃ、その長さで嬉しいとほぼ全員思うさ。足は出てるわ、パンツは見えそーだわ。

けど、男にもいろいろあって、遠慮なくガン見する奴もいれば、見ちゃいけないし恥ずかしいしで、見たくない奴だっている。

まあ、女子からしてみれば、男に見せる目的でミニスカをはいているわけじゃない。っていうのは分かるが、男からしてみれば、「見て」と言われているようなもんだ。

見なければなにもないが、もしも見ていたところがばれたら、そのときから表でも裏でも「変態」「気持ち悪い」と囁かれることになる。

それは、嫌だ。

それは、困る。

っていうか、オレはどつちかというところ、見たくない派だっているのに、偶然にも見えてしまうことが多い。

まるでマンガのような話だけど、風が吹いて、前を歩いていた女子のスカートがばあって捲れたり、階段登つてるときにふと視線を上げたら見えたり。お前、わざとだろって思うくらい、これみよがしにパンツを見せて歩いている女子もいる。

もちろんすぐに視線をそらすけど、なんていうか、その後しばらくシヨックが続く。

不可抗力とはいえ、見てしまった後の罪悪感というか。

最近じゃあ、三人の女子がちやりんこを漕いでいて、その全員のパンツが見えていた衝撃と叫びたらなかった。

しかも、前。

後じゃ、ない。

そのことを中条くんと話したら、中条くんは目をまんまるにした。

「高橋は、パンチラ見る率ほんつと高いな」

「中条くんは見ないの？」

「オレはーあんまり。たぶん背丈の問題もあるんじゃない？ オレは背が高い分目線が高いけど、高橋、ちっこいから」

「ちっこい……」

まあ、確かに。

オレの身長はそんなじょそこの女子とあまり変わらない。男にしてみればチビだ。チビでよかったなあ〜と思うことって本当にない。高いものは届かないし、女子には見下ろされるし、パンツは見えないしって、いいとこなんにもない。

溜め息をついたオレに、中条くんはがっつりと肩をくんできた。

「いーじゃんつらやましい。目の保養ってやつ？」

「えー。オレ、見えても嬉しくない」

「高橋、シャイだもんなー」

「シャイ？」

こんな性格をシャイだなんて、イイカンジに言われたのは初めてだ。

中条くんはオレの顔をぐっと引き寄せて、こっそり耳打ちした。

「ちなみに高橋くん、どんなパンツ好きよ？ オレはねー黒とかー」

ヒモとかー結構大人よ？」

黒？ ヒモ！

それは……ちよつとオレには刺激が強すぎる。自分の顔が熱くなつたのが分かった。あー恥ずかしい。

「オレは、あんまり、そーいうの、興味ない」

「はーそっかー。やっぱり高橋はシャイなんだなあー」
「そういう問題じゃないと思うけど。あれだよ、女子も寒いんだつたら、毛糸パンツでもはけばいいのにつて思う」
「すっげー色気ないから、オレは嫌だなあ。スカート捲れて、お！つて思つたら毛糸パンツだなんて、なんてロマンのない……」
「寒いなら 是はばいいのに 毛糸パンツ……」
あ。思わず口ずさんだオレの歌に、中条くんは即座に反応してきた。

「お。なに今の、歌つたる？」

そんな楽しそうな顔しなくつてもいいのにつて思つくらい、満面の笑みだ。

本当、オレの歌の、どこがそんなに気に入つたのかなーつて思つよ。

「や、あの、つい、思わず。ごめん」

照れ隠しにメガネをぐいぐい上げていると、中条くんは腕組みをしながら、うんうんと頷いた。

「さすが高橋。日常のありとあらゆるものも歌にするとは」

「いや、そんなたいしたものじゃないからね、うん……」

「寒いなら 是はばいいのに 毛糸パンツ！ な！ 沢田！」

「え……？」

さ、沢田つて、まさか。

女子ならだれしもが「きゃー」と叫びそうな、爽やかな笑顔と、ウインクと、ぐつと立てた親指を中条くんから向けられても、オレたちの真後ろにいた沢田サンはうんともすんとも言わずに、ただただ顔を顰めた。

これはまさに死亡フラグ、と思つのはオレだけ？

妙な緊張感が辺りを覆つた。

肌寒いと思つのは、たぶん、沢田サンから発せられているなにかに違いない。

沢田サンはイケメンで長身の中条くんをしばらくの間睨みつけた

後、その背後にいたオレに視線を移してきた。

ギクリと体が強張るのもしかたがない。その視線はとんでもなく冷たかったのだから。

沢田サンはしばらくした後に、オレたちに「最低」という言葉を残し、ふいつとその場から行ってしまった。

ああ……沢田サン。

次の数学の時間に、教科書見せてもらえなかったらどーしよーと、内心困り果てるオレに、中条くんは男らしく笑った。

「あいつ、ジョーク通じねえなー」

「そーだねー……」

普通の女子なら、あそこで中条くんが何を言っても、「きゃー」で済むのに。沢田サンは面食いじゃないらしい。

そのことにちよつとほつとしながら、オレは、帰り道にある雑貨屋の店頭で飾られていた毛糸のパンツたちを思い出した。

特にピンク地のサル柄とか、沢田サンがはいたらかわいいと思っただけど、とりあえず、内緒にしておこう。

高橋くんの歌₃ パンツ(後書き)

読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3594f/>

高橋くんの歌

2011年1月16日14時30分発行